

「八郎潟・八郎湖学」の創造

谷口吉光（秋田県立大学）

このたび「八郎潟・八郎湖学研究会」という新しい研究会を立ちあげることになりました。来る3月10日に八郎潟町で設立記念の集いを開催します。

「八郎潟・八郎湖」という聞き慣れない言葉は私たちが考え出した新しい言葉です。「八郎潟と八郎湖をつなげて考えよう」という思いを込めています。思えば、1957年に始まった干拓事業によって、日本最大の汽水湖だった八郎潟は80%が陸地化されて大潟村になり、残った20%が「八郎湖」と呼ばれる淡水湖になりました。

この時、多くの人々は「八郎潟はなくなった」と思いました。石田玲水の有名な「わがみずうみ」という詩も、川辺信康の「潟の記憶」、石川次男の「消えた八郎潟」などの写真集も、みな失われた八郎潟への郷愁に満ちています。干拓前、八郎潟を囲む潟上市から三種町、能代市、男鹿市に至る地域には、潟と密接に結びついた多彩な地域文化がありました。漁業と佃煮を中心とした経済、潟の魚を食べる魚食文化、ヨシ原が広がる景観、八郎太郎伝説や子どもの遊びなどです。しかし、干拓によって周辺地域の人々は八郎潟を奪われ、八郎潟とともに生きていく未来を失ったと言っているでしょう。

残された八郎湖には1980年代中頃からアオコが発生するようになり、「水が汚い」「汚れた湖」という悪いイメージが定着するようになります。秋田県は八郎湖の水質改善対策を30年以上も続けていますが、水がきれいになる見通しは今も立っていません。

2003年からは、秋田地域振興局が流域住民の参加によって八郎湖の環境再生を図ろうとする「環八郎湖・水の郷創出プロジェクト」という政策を始めました。これは干拓以来「八郎湖の再生」をテーマにした初めての政策でしたが、地域の人々から熱い反応があり、10を超える住民団体が立ち上がり、水草の植え付け、草木谷の再生、ブラックバスの駆除、小学生への環境学習など多彩な環境活動を展開しました。やがてそれがつながり「環八郎湖市民ネットワーク」が結成され、その中軸を担う団体としてNPO法人はちろうプロジェクト（はちプロ）が設立されました。私は設立以来はちプロの副代表理事を勤めています。しかし、肝心の水質改善の見通しが立たないなか、残念ながら、住民団体も徐々に勢いを失い、活動が停滞するようになりました。このままでは「八郎湖の再生」という機運そのものが消えてしまう。この行き詰まりをどうしたら突破できるだろうか。悩みの中から浮かんできたのは「八郎潟はなくなっていない。面積は5分の1になったが、『八郎湖』という名前でも今も存在し、たくさんの魚や生きものが厳しい環境を耐えて生き続けている」という考えでした。それが発展し、次の研究会の呼びかけ文に結実しました。関心ある方のご参加をお待ちしています。

八郎潟と八郎湖を連続したものにとらえ、研究者と住民が協働して八郎潟・八郎湖の価値を再評価する新しい学問を作り、潟の歴史を未来につなぐ新しい物語を紡ぎだそう！

（北羽新報「トランジションの風」 2018年3月9日掲載分に加筆・修正した）